

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520514

研究課題名(和文)表記体と文体からみた変体漢文と和漢混淆文との連続性の研究

研究課題名(英文) A study on the relation of Hentaikanbun and Wakankonkoubun, as seen by writing-style and language-style

研究代表者

乾 善彦 (INUI, Yoshihiko)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：30193569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：古事記や正倉院文書などの古代語の散文文体は、変体漢文という表記体としてでは論じることができない。その点で、平安時代に成立する仮名文学作品は仮名による表記に支えられて文体として論じることができる。両者の間には漢文訓読のことはを媒介として成立するという関係がある。つまり、変体漢文という和漢の混淆と、さらにそれを訓読することによって、カタリのことばと漢文訓読のことばとの混淆とから、仮名の成立を契機に仮名文学作品の文体が成立するが、初期仮名文学作品の実態は、「和漢混淆文」という日本語の書記用文体(散文文体)の成立でもあったことを明らかにした。その先に平安和文と中世和漢混淆文との分離がある。

研究成果の概要(英文)：Hentaikanbun, that is a way ancient Japanese writing, is not expressive of a speech. Only with writing in Kana, we can express a speech. We can only argue about a style of ancient prose style by something written in Kana. The reason why, we could not have prose style without establishment of Hiragana. Hentaikanbun is a mixed style of writing in Japanese and in Chinese, and Wakankonkoubun is a mixed style of language, used in Kanbunkundoku and used in daily life. The two methods are common in mixed style in Chinese and Japanese. We can see the respective method of mixing of Chinese and Japanese in respective period. The style of many literary works written in Hiragana in early Heian period is not pure Japanese but Wakankonkoubun. After that, in 11th century, Wabun established from Wakankonkoubun, and 12th century, Wakankonkoubun in middle ages (e.g. Heike Monogatari) established by mixing Wabun and early Kanabun.

研究分野：日本語学

キーワード：和漢混淆文 変体漢文 表記体 文体 仮名 話しことば 書きことば

1. 研究開始当初の背景

近年、大量に出土する7・8世紀木簡は、古代書記資料の増大とともに、正倉院文書を日本語の書記資料として見直す契機ともなった。その結果、文書木簡と正倉院文書の日用文書との類似性が、古代官人社会における日常の文書形式のありかたを示すものという認識が定着してきた。しかし、一方で、かめいたかしが「古事記はよめるか」と問いかけた、古代漢字専用文(いわゆる変体漢文)における文字とことばとの関係には、解明されなければならない問題を残している。特に通時的な側面では、平安時代になって仮名で書かれる和文(仮名文)や和漢混淆文のことばとの関係や、平安時代以降にも用いられる変体漢文と、それ以前の漢字専用時代の漢字専用文との文体的な関係が、日本語の散文文体史の中に位置づけられなければならない。

これについて、和漢混淆文の成立に漢文訓読が深くかかわると考えられるものの、散文文体全体を通じた議論はなされていない。以前に拙稿「表記体の変換と和漢混淆文」(『古典語研究の焦点』(2010、武蔵野書院)で、表記体の変換が、漢文、変体漢文、和漢混淆文のあいだでもたらされるときに、文体としてあらたな書きことばが生じる可能性をのべたが、平安時代に和文(仮名散文)が成立して、文字とことばとのあいだにより密接な関係が生じてから、一方でなお使いつづけられる変体漢文(記録体)と、あらたに生じた和漢混淆文とが、漢字専用時代の変体漢文から、何をどのように継承して展開しているのが課題としてのこっていた。

2. 研究の目的

和漢混淆文と変体漢文とは、ともに、漢文および漢文訓読の影響下に成立した日本語文ととらえることができる。本研究では、両者の成立基盤と通史的な展開をおうことで、以下の点を明らかにする。

両者が漢文訓読の方法による成立基盤をもつ言語形式であること

両者が使用される位相によって、表記体が異なることで、それぞれの発展形態が異なること

表記体の概念を導入することで、平安時代の和文(仮名散文)も、漢字専用文と漢文訓読との関係でとらえること

3. 研究の方法

具体的な方法としては、次の四点に集約される。

漢字専用文の整理。変体漢文に若干仮名を交える公家日記、古往来、宣命書文書などの用途と位相を整理する。

和漢混淆文の漢字片仮名交じりと、宣命書の仮名交じりととの比較を通じて、漢字仮名交じり文の文体的特徴を明らかにする。

土佐日記、三宝絵などの初期仮名散文中の漢文訓読的要素を、漢字仮名交じり資料と比較することで、仮名散文と漢文ないし漢文訓読との関係を明らかにする。

平安時代を通じてほぼ出そろった日本語散文文体、つまり漢文、変体漢文、和漢混淆文、仮名散文の相互関係を、表記体と文体との観点から、総合的に記述する。

以上の四点によって、古代漢字専用文から平安時代にさまざまな種類の日本語散文へと展開する過程を明らかにする。

4. 研究成果

まず、本研究における大きな成果として、以下の2点がある。

変体漢文から和漢混淆文への展開を、ひとつの目的的題材として、「戦争の記録」を取り上げて、同一の題材が、時代を通じてどのように展開してゆくかということを記述したことである。

漢文ないし変体漢文は、上代、漢字専用時代において唯一の記録方法であったが、日本書紀や続日本紀のような、漢文体の正式の記

録と異なって、古事記は単に記録としてではなく、物語としての記述が中心である。これを引き継ぐかたちで、軍記物語である将門記が成立するが、それは漢文ないしは変体漢文という方法で、ひらがな成立以降の時代において、前時代を受け継ぐものであった。それは記録という文体を抜けきらない段階であったといえる。それが、軍記物語というジャンルを形成するには、それがひらがな文ではなく漢字仮名交じり（古い段階では漢字片仮名交じり）であった点を考えると、和漢混淆文の成立が必要であった。変体漢文から和漢混淆文へと展開するひとつの「場」として、内乱など歴史的な記録を記述する場のあったことを明らかにした。（論文、発表）

これにともなって、変体漢文である古事記の文章について、そのことばと表記体の関係に検討を加えた。仮名書き部分に「カタリのことば」を見出す方策として、仮名使用の実態を、いままで等閑視されてきた固有名詞表記を含めて検討した結果、神名人名においては、古体の仮名の用法を交えることで、古事記だけでなく日本書紀その他の資料との照合が必要なこと、地名に関しても地名起源伝承には伝統的な表記とともに、古事記成立時の意図的な表記もまじっており、それがかえって、古伝承の存在を予想させることを指摘し、今後、古事記の表記における種々の層の引きはがしによって、古事記に書かれたことばを特定することができるという見通しを立てた。（論文）

その上で、古事記の文章に含まれる漢文訓読的な要素は文体の基調を形成しており、仮名で記された和文的な要素をカタリのことばとしてとらえることで、漢文訓読のことばとカタリのことばとの融合の形を考え、これに対して仮名文学作品の文体は、カタリのことばが枠組みをなしているが、全体としては漢文訓読のことばが基調である点で、古事記とのつながりを考えられることを明らかにした。

（論文）

また、文字とことばとの関係について、以下のような成果を得た。

仮名文学作品に用いられる散文文体の成立は、ひらがなの成立が基盤としてある。つまり、ひらがなが成立することによって、カタリのことばを基調とした枠組みが成立しえた、つまり、書きしるすことができるようになった。それが変体漢文である古事記と仮名散文である仮名文学作品との大きな差異であり、仮名散文が助動詞「けり」で統括された和漢混淆の文章であることも、これによって説明できることを明らかにした。（論文）

さらに、最終年度のまとめとして、古代において話しことばと書きことばということを考えてとき、話しことばの位相に注目しなければならないことを論じた。つまり、古代において、現代でもそうだが、話しことばという場合、人々が男女を交え生活するときのことばと、律令官人たちが日常の業務において使用することばとは、同じ話しことばであっても、各段に差のあるものであったと考えられる。カタリのことばと漢文訓読のことばとをそのように考えるならば、古事記のような文章において変体漢文によって記されるのは漢文訓読的なことば、仮名で記されるのはカタリのことばという、話しことばを基調として考えられる。そう考えることによって、変体漢文で記される漢文訓読的なことばを基調として、変体漢文をいう書きことばは成立すること、「けり」を基調とするカタリのことばは、同じく「けり」を基調とするウタのことばと通じること、そしてそれは仮名書きされる習慣を早くから獲得していたこと、したがって、そのようなことばを基調とする仮名文学作品語は仮名書きされることから生じたこと、などが考えられ、そこに日本語散文文体成立の過程を描くことができるという道筋が考えられた。だとすると、変体漢文から和漢混淆文が生じる過程は、漢文訓読という

ひとつの和漢の混淆から生じたことになり、これによって、変体漢文は和漢混淆のひとつの結果でありながら、漢字片仮名交じりの和漢混淆文を生み出す契機でもあったという結論が導かれることになって、本研究の目的はここにひとつの達成を見ることができる。(論文)

なお、最終的には、これらの論文に、課題のひとつであったデータ公開として『三宝絵三本対照本文』を加えて、報告書『表記体と文体からみた変体漢文と和漢混淆文との連続性の研究』(全184頁)を作成した。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

万葉集仮名書歌巻の位置 乾善彦 萬葉 218 査読有 1-20頁 2014.12

古代における書きことばと話しことば 乾善彦 『話し言葉と書き言葉の接点』(ひつじ書房) 査読無 171-186頁 2014.9

古事記の文章法と表記 乾善彦 萬葉語文研究第9集 査読有 57-73頁 2013.10

仮名の用途からみた万葉仮名とひらがな 乾善彦 日本語学 32-11 査読無 14-25頁 2013.9

誰が主役か脇役か 日本語表記における漢字と仮名の機能分担 乾善彦 日本語学 2013年4月臨時増刊号(32-5) 査読無 157-166 2013.4

日本における内乱の記録と表現 戦乱を記録する文体 乾善彦 『戦争の記録と表象 日本・アジア・ヨーロッパ』(関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ10、関西大学出版部) 査読無 79-99頁 2013.3

古事記の固有名表記 地名の場合 乾善彦 『国語文字史の研究十三』(和泉書

院)査読有 1-12頁 2012.12

古代の仮名使用と万葉歌木簡(韓国語) 乾善彦 口訣研究第29輯 査読有 25-42頁 2012.8

〔学会発表〕(計3件)

乾善彦 万葉集仮名書歌巻の位置 2013.10.12 萬葉学会全国大会 於 東京大学本郷キャンパス

乾善彦 日本における内乱の記録と表現 戦乱を記録する文体 2012.9.22 国際シンポジウム「戦争の記録と表象 日本・アジア・ヨーロッパ」 関西大学東西学術研究所 於 関西大学以文館4階セミナースペース

乾善彦 続日本紀宣命と漢語 2012.4.28 第100回国語語彙史研究会 於 京都大学文学部

6. 研究組織

(1)研究代表者

乾善彦 (INUI, YOSHIHIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号: 30193569

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし